

河川・流域(1) (1-A-9-1～1-A-10-2)

本セッションでは 11 件の河川流域における水質関係の発表があったが、今回よりレビュー講演なるものが一般講演に先立って行われようになった。水環境の実態調査分野では永淵がノンポイント汚染についてレビュー講演を行った。一般講演 11 編の調査対象域は 10 編が河川上流域(源流域)で、1 編は上流域と都市域両方で行ったものであった。研究対象は 6 編が河川水、降雨 1 編、ダム湖底泥 1 編、湧水 1 編、土壌 1 編、大気 SPM、降雪、渓流水を含めたもの 1 編であった。対象とする物質は、窒素 3 編、リン 1 編、窒素・リン 1 編、溶存有機炭素 1 編、主要イオン 1 編、落葉 2 編であった。

1-A-9-2 は谷川岳源流部で調査を続けられている個人研究者であり、現場で感じた環境変化を調査研究に結び付けている貴重な成果である。1-A-9-3 は利根川上流域の河川中高窒素濃度の原因が首都圏の大気汚染と関連付けたものであり、今後よりいっそうのデータの収集が望まれる。1-A-9-4、1-A-10-4 は琵琶湖集水域、生野ダム集水域における栄養塩、主要イオンの流出特性の追及を行っている研究でありここ数年多くの研究成果が発表されている。1-A-10-1 および 1-A-10-2 は源流域での落葉の問題を扱ったものである。前者は落葉の渓流水質への影響を考察したもの、後者は落葉の水質や利水障害への影響に対処するためにその排出量の時間的・空間的変動要因を解明したものであり、今後の発展が期待される。1-A-11-1 は渓流水中の有機態の窒素に着眼したものであり、その流下過程での窒素の形態変化を含め興味ある発表であった。1-A-11-2 はダム湖水質への底泥の影響をその粒度組成、リンの濃度から解析したものであるが、リンの分画も含めたいっそうの発展が望まれる。

1-A-11-3、1-A-11-4、1-A-12-1 は河川水中の DOC 濃度形成を対象としたものであり、同一機関の一連の研究である。降雨時流出時、基底流出時の濃度形成を地下水、湧水、森林土壌からアプローチしたものであり、その体系的成果が期待される。

(千葉科学大危機管理学部 永淵 修)